



図-2 アブラナ科野菜の花および莢
 (A) 各花器官の配置, (B) キャベツの花, (C) ダイコンの花, (D) キャベツの莢

ワーは蕾形成よりも手前の未発達な花芽原基が塊状になったものを収穫している。また、日本のカリフラワーの品種は白色のものが多いが、中には紫色や橙色等カラフルな花蕾を持つものも存在する。

多くのアブラナ科植物は他殖性であり近交弱勢を防ぐ機構を備えている。他殖性植物の中には雌雄いずれかの単性花をつける種も多く存在するが、アブラナ科の場合は前述のとおり両性花をつけ、主に自家不和合性によって他殖性を維持している（全てのアブラナ科野菜が自家不和合性を持つわけではなく、例えば西洋ナタネは自家和合性である）。アブラナ科の自家不和合性の場合、雌雄いずれの生殖器官も正常に発達するが、自己の花粉が付着したことが柱頭上で認識されると、雌蕊内部への花粉管の伸長が阻害されて自家受精できなくなる。アブラナ科野菜で自殖したい場合には、炭酸ガス処理によって自家不和合性を打破する方法や、開花前の蕾では

自家不和合性が弱まる性質を利用した蕾受粉（開花前の蕾を開き、同一個体の成熟花粉を未熟な雌蕊に受粉させること）等が有効である。今回紹介した4品目をはじめ、アブラナ科野菜の種子は、主に雑種強勢や生育の揃い等の利点を活かしたF1種子として販売される。効率的にF1世代の採種を行うため、自家不和合性を示す両親系統を交互に栽培して他家受粉させる方法が古くからとられており、育種の現場でもその生殖様式が活用されている。

通常、アブラナの花と言えば、いわゆる菜の花畑をイメージする方が多いだろう。しかし、全く異なる草姿を持つものの、今回紹介した野菜も広義では同じく菜の花をつける植物なのである。春になって河川敷を黄色に染める菜の花の群落を眺める時、野菜における菜の花の成り立ちについて一緒に考えてみるのも面白いのではないだろうか。

田畑の草種 **夕化粧 (ユウゲシヨウ)**

(公財)日本植物調節剤研究協会
 兵庫試験地 須藤 健一

アカバナ科マツヨイグサ属の多年草。北アメリカ南部原産で、明治時代に観賞用として輸入されたものが逸出し、関東以西に広く分布する。背丈は30～40cmで、大きくても50cm程度。日当たりのいい路傍や農地周辺に定着している。5月から9月ごろに葉のもとから1cmから1.5cmの薄紅色の花をつける。花弁は4枚、めしべは先端が4裂し、おしべは8本。ともに良く目立つ。

植調兵庫試験地の水稻の育苗は専業の農家さんをお願いしている。農家さんはコシヒカリに始まって山田錦まで、最近では少なくなってきているが、多い時には育苗センターを兼ねて7,000枚ほどを育苗していた。一番早いコシヒカリは4月の下旬に播種されるが、その苗は育苗専用の露地に設置されたビニールハウスに展開される。ハウス内は均平になるよう丁寧に草刈りされ、育苗箱は黒マルチシートを敷いた上に並べられるが、30日余りの育苗の終わりころには、マルチを敷いていない土の面はスギナで覆いつくされる。シートの下のスギナは黒マルチを突き破り、さらに育苗箱の底穴をうまく見つけて箱に入り込み、苗と同じような顔をして苗の間に現れる。スギナ

は水の張られた田んぼへ移植してもそこで広がることはないの、農家は平気でスギナが混ざったイネを植えることになる。

苗が全部出荷されて、ハウスのビニールが外され、育苗箱の下に敷かれていた黒マルチも取り除かれると、メヒシバ、オヒシバ、ノビエなどのイネ科草種が一斉に頭をもたげてくる。それらのイネ科雑草に混じってこのユウゲシヨウも顔を出し、7月には艶やかなピンク色の花を咲かせる。

「夕化粧」の名の由来は、午後遅くに艶やかなピンク色の花を咲かせることからとされるが、この植調兵庫試験地のユウゲシヨウは午前中にはピンク色の花を咲かせ、夕方にはその花を閉じていることが多い。この花は、明治時代に観賞用として輸入されたそうであるが、明治の人たちはこのアメリカ大陸の貴婦人が夕方に艶やかなピンク色の花を咲かせるのを見て「夕方に慎ましやかに化粧をするようだ」として「夕化粧」と名付けたのであろうが、貴婦人たちが各地に広がって落ち着いてしまうと、どうどうと昼間から「化粧」するようになった。

この「昼」化粧の特徴は植調兵庫試験地だけの特徴でもなく、あちこちで普通に見られる、とのことである。